

## 環境地図作品展の取り組み

北海道滝川高等学校 小野寺 徹

### 環境地図で地域を見つめる

環境地図づくりは、五感を使って環境の中のさまざまなつながりを考え、さらに見方や視野を広げていくというものである。私たちが普段何げなく見過ごしている地域にもう一度目を向けて丁寧に見て調べることによって、ごく平凡なあたりまえの風景として見過ごしていた地域に様々な姿の発見ができる。新たな発見をした時、心に何かを感じる。驚きであったり、こんなことでよいのだろうか、こんなすばらしいものを守っていかなければと疑問や意識を持ったりする。そうした中で地域の構成メンバーの一人として生活者の視点で地域を見つめるようになり、地域認識が深まっていくのである。環境を考えるうえで地図の果たす役割は大きい。

私の住む地域は、畑やりんごのある農村地帯。2002年8月、近くに産業廃棄物処分場ができるという計画を知った。住民が知った時はすでにアセスメントも終わっており、2か月後には許可がおりる予定であった。この地域は地下水を使って汚染がたいへん心配であった。出された書類や地図を丁寧にみることから始めたところ、アセスメントに使われていた地図情報が間違っていることを見つけた。この発見が計画を白紙に戻すきっかけになった。

### 「私たちの身のまわりの環境地図作品展」

北海道旭川市で毎年開かれている「私たちの身のまわりの環境地図作品展」(環境地図作品展)は、児童生徒が自らの観察・調査を地図に表現した作品の展示会である。1991年8月、旭川市で「環境変化と地理情報システム国際会議」が開かれた。記念切手も発行されたこの国際会議は、世界の各地から多数の専門の研究者が集まり、広く注目を

集めた。その時、研究者だけの集会に止めず、いくつもの関連行事を開いて学術の普及を図った。その一つが環境地図作品展である。すぐれた作品がたくさん集まり、多くの方から賞賛の言葉が寄せられ、継続の要望が強く、環境教育と地図教育の一層の振興を図る一助としたいとの思いから毎年開催となった。それから継続して今年で第15回目である。現在は環境地図教育フェアとし、期間中は環境地図作品展の他に環境地図教育研究集会、みんなの環境地図ワークショップ、わいわいパーティー、表彰式を開催している。

### 環境地図作品展の3つの特色

第1の特色は、身近な環境を題材とし、児童生徒が自ら観察・調査したことを地図に表現した作品を展示していることである。テーマの設定、調査の仕方、表現の方法などは製作者に任されているからこそ、製作者の感性や手法によりさまざまな表現が可能となり、出される作品は豊かな発想が示された興味のあるものばかりとなる。



ユニークなテーマ「犬の散歩道」(中1)

第2の特色は、応募者の地域的限定がまったくないことである。応募者は、小学生から高校生に

限られるが、全国どこからでも応募でき、海外からも応募できる。海外からは、アメリカ、エクアドル、韓国、キューバ、ジンバブエ、ブルガリア、リトアニア、タイ、フィリピン、スリランカ、モルジブ、中国などからの応募があった。



いきいきと描かれた人々の生活 (ジンバブエ)

第3の特色は、作品展の質的な向上を図るための活動である。その最も目立つものは、毎年印刷している募集ポスターであって、前回の優秀作品10点程を掲げ、審査の際の講評の要約も記してある。「私たちの身のまわりの環境地図づくりマニュアル」は作品作成の手引き書である。子どもたちが夏休みの自由研究をする場合や市民のまちづくりにたいへん役立つ。添付のCD-ROM「いろいろな環境マップ」は第1回から第12回までの作品を収納しており、環境地図指導の補助教材としても利用できる。



CD-ROM つきマニュアル



募集ポスター

### 滝川高校での取り組み

環境地図づくりを高等学校で取り組むには、夏休みの課題として取り組ませることが、一番可能な方法であろう。本校では、2年生の地理A選択

者に課題を出していた。しかし、1997年からカリキュラムが変わり、地理は3年生日本史Bとの選択となり、環境地図に取り組みせるのが難しくなった。2003年からは1年生前期地理A必修、2年生後期から3年生にかけ地理Bと世界史Bと日本史Bの選択となった。1年生で地理A必修となったのは、世界地誌をしっかりとってから世界史や政経を学習した方がよいとのことからである。現在、夏休みの課題はレポートと環境地図の選択としている。事前に授業で環境地図づくりについて説明をする。夏休み明け、プレゼンテーションを義務づけ、他の生徒からのアドバイスや評価を受ける。



ポスト分布図

### 環境地図づくりを世界に普及

今年の2月、マケドニアで開催された環境地図コンテストの展示会に約2000人が集まった。推進しているのはJICA調査団。日本はODAで発展途上国の地図を作成している。しかし、地図は一般市民にはまったく馴染みがなく、せっかく作った地図も有効に活用されていないのが現状である。そこで地理情報の普及のために環境地図コンテストを企画。JICAの地図案件の中でもこの種のイベント実施は初めて。同じ手法で他の地域にも広げていけば、作った地図が、現地で大いに使われるであろう。マケドニアでの入賞作品が第15回環境地図作品展に出品される。



展示会場の様子(マケドニア)